

あった。損傷した動静脈を結紮し手術は終了した。その後、患者は覚醒し合併症を残さず退院した。心停止の原因は Hb 低下による心筋虚血と考えられた。出血量は 2,000 ml 以上はあったと思われる。局麻下で緊急手術を行う場合も術前に患者評価を確実にすることが重要と考えられた。

11) 脊髄損傷後20年して生じた脳出血の中枢痛(知覚脱失部疼痛)に対する脊髄硬膜外通電の試み

佐藤 舜也・間庭 芳文 (県立吉田病院)
高橋 純一・早津 和則 (整形外科)
羽柴 正夫 (同 麻酔科)

患者は 1921 年生まれ男性、72 年 4 月に労災事故で第 12 胸髄節以下の完全麻痺となる脊髄損傷となり、75 年より吉田病院で主に外来患者として治療を受けていた。いつからともなく VAS 2~3 程度の知覚脱失部である大腿前面の疼痛をうったえていたが、92 年 6 月に左頭頂部の脳出血による右片麻痺で入院。脳出血の mass effect がある間は知覚脱失部の疼痛をまったくうたえなかったが、麻痺が改善するにつれて、VAS 7~8 程度の両側大腿前面の強い痛みをうったえた。いろいろな薬剤は無効であり、92. 12 に脊髄硬膜外通電を行なうことで VAS 1~2 程度に痛みが改善した。それから 1 年たった現在も通電は有効であり、患者も家人もともに満足している。

12) 脊椎手術後の疼痛管理

一術野からの硬膜外カテーテル挿入一

速水 正・河野 達郎
国分誠一郎・遠山 誠 (竹田総合病院)
傳田 定平 (麻酔科)
笠間 史文 (同 整形外科)
野口 良子 (新潟大学麻酔科)

脊椎手術に対し術中に硬膜外カテーテルを留置し塩酸モルヒネの持続注入により術後の疼痛管理を行った。当院では 92 年 1 月より 34 症例に対し術中に硬膜外カテーテルを留置しており今回、最近の 9 症例について覚醒時、術後 2 時間後、12 時間後、24 時間後、48 時間後、72 時間後に Visual Analog Scale (VAS) を用いた疼痛状況、他の鎮痛剤の使用状況、合併症の有無について検討した。VAS では覚醒から 2 時間までが不十分であり術後急性期の痛みに対してなんらかの対応が必要と考えられた。呼吸抑制など重篤な合併症はみられなかった。また 91 年

以降のカテーテル留置例 28 例とカテーテル非留置例 27 例で他の鎮痛剤使用状況をみると 12 時間後、24 時間後、72 時間後で有意にカテーテル留置例で鎮痛剤使用回数が少なかった。カテーテル留置例で鎮痛剤を術後 3 日間で、1 回以内の使用の有効例は全体の 75% であった。また最近では頸椎の手術についても留置を試み、良好な鎮痛を得ている。

13) Orbitalgia に対する ciliary ganglion block の適応と効果

相田 純久・熊谷 雄一
早津 恵子・李 青 (新潟大学麻酔科)

強い Orbitalgia を主訴 (平均 VAS \pm SD=88.3 \pm 7.3) とする 6 例の患者 (RSD 2 例, TCS 1 例, PHN 1 例, 非定形顔面痛 2 例) に対して ciliary ganglion block (0.25~0.5% bupivacaine, 0.8 ml: CGB) を行った。このうち 3 例は SGB 無効例であった。平均罹患期間は 29 カ月、平均ブロック回数は 6.7 回、平均治療期間は 35.3 日であった。CGB 治療の結果、これらの患者の平均 VAS は 17.0 \pm 11.8 と有意に ($p < 0.01$) 減少した。眼窩内の自律神経支配は ciliary ganglion により、また知覚支配は nasociliary nerve によりなされており、orbitalgia に対して CGB を行うことは有効性が高いことが示唆された。

14) 閉塞性動脈硬化症による間欠性跛行を疑われてペインクリニックを受診した 2 症例

早津 恵子・熊谷 雄一
相田 純久 (新潟大学麻酔科)

閉塞性動脈硬化症 (以下 ASO) による間欠性跛行を疑われペインクリニックを受診したもののなかで、間欠性跛行の原因がそれぞれ脊柱管狭窄と腹部大動脈瘤という対照的な疾患であった 2 症例を経験したので報告する。

(考察) ASO による間欠性跛行を主訴にペインクリニックを受診する患者は多く、その治療には、交感神経ブロックは有効な手段である。しかし間欠性跛行は、血管性と神経性に分類され、各々の治療法には大きな差異がある。症例 1 は脊柱管狭窄症による神経根症状と考えられ、症例 2 は腹部大動脈瘤内の血栓による塞栓症と ASO によるものと考えられた。以上の 2 症例から、同様な症状からも多彩な病変が推測される間欠性跛行には、その診断に十分な注意が必要と考えられる。